

唯識無境についての一考察

菊地 哲

唯識思想では、十地経における有名な「三界唯心」の一文によっても分かるように、外界を自己の心の現れとし、外境の存在性を徹底して否定する。従って、唯識論書において「外界に事物が実在している。」というような表現は、決して見られない。ところが、唯識仏教における重要な用語の一つに「顕現する (snai pa)」という言葉があつて、「外界に事物が顕現している。」という表現は、唯識論書において随所に見受けられる。それでは、外界に事物が「顕現している (snai ha)」ということと、「実在している (rod pa)」ということとは如何なる違いがあるのか、そのことについてまず「顕現する」という言葉についての考察から始めてみる。

ところで、撰大乘論の第二章の世親釈の中で、この顕現するという言葉について世親が次のように注釈しているのが見られる。すなわち「顕現するとは、対象物として認識することである。」と述べられていて、これによって顕現することの最も基本的な性格を一言で言えば、それは「認識 (dngis pa)」であるということが分かる。つまり顕現とは、簡単に言えば認識なのである。この dngis pa という言葉は、何かある対象物を客観的存在として捉える、あるいは対象化するという意味であるから、そこには必然的に客観に対する主観としての自分、私というものが、立てられていなければならないことになる。

従って、顕現するとは対象物が私によって認識されるということである。それをもう少し分り易く言えば、私によって様々なのが見られたり、聞かれたり、知られたりするということであり、更には対象物を介在してそこに私という自分を中心とした世界が、開かれてくるということである。つまり、対象物が私という自分の世界に引き込まれ、そこに「自分にとっての」対象物という一つのイメージが、出来上がる。しかし、それによって真の姿が現し出されているわけではない。

何故かという点、それはそこに「自分にとって」という主観が入っているからである。

従って、先程序論で問題提起した「顕現する」ということと、「実在する」ということとの決定的な違いは、この「自分」という意識の有無にあるのではないかとということが推測される。それでは次に、この顕現するという言葉が三性説の中でどのように使われているのか、考察してみたい。

ところで、撰大乘論の第二章第二節から第四節にかけて、三性説について論ぜられているのが見られ、その第二章第三節において遍計所執性について述べる箇所、無著は次のように言う。「遍計所執性とは何か。対象物は実在せず唯識であるとき、それにもかかわらず対象物そのものが(実在するかのよう)に顕現していることである。」それでは対象物が顕現するとは如何なることなのか、本節の世親釈を参照してみる。

「遍計所執性とは何か。対象物が実在しなくても、実在するものように顕現していることである。唯識であるけれど対象物そのものかとは、実在しない対象物の顕現であつてすなわち我というものの対象物が顕現しているに過ぎない、そういう現れなのだ。」

対象物そのものが顕現しているとは、所取なるものとして顕現していることであつて、つまり無我なるものが我として顕現しているのである。」

本節の世親釈によると、実在しない対象物の顕現というのは、我というものの対象物が顕現しているに過ぎないのだと注釈されている。「対象物が顕現している」という本論の言葉は、世親釈の中で「所取なるものとして顕現していることである」と注釈されているが、顕現の最も基本的な性格は「認識」であつたから、世親釈の一文中の顕現という言葉に置き換えてみると、「所取なるものとして認識されている」という意味になる。それでは誰によって認識されているのかといえば、それは当然所取に対する能取である自分、私によってに他ならない、従つて、全体をもう少し分り易く説明すると、「対象物が顕現している」というのは、「対象物が所取なるものとしてつまり客観的存在として、能取である自分、私によって認識されている」ということになる。従つて、先の「我」といふものの対象物」というのは、私によって認識された外界の対象物、「私にとつての対象物」ということになる。それでは次に、その我といふものの対象物が全く顕現しなくなつた状態、すなわち円成実性について考察してみよう。

ところで、撰大乘論の第二章第四節において円成実性について述べられている箇所がある。そこで、無著は次のように言う。「円成実性とは何か。それは、かの依他起性においてかの対象物の相が、全く実在しないということである。」それでは、前節と同じく本節の世親釈を参照してみる。

「円成実性とは（何か）。およそ実在せず真実にあらざるもの

が顕現するための因（依他起性）というものが、我といふものの対象物として顕現することが、全くなくなつたものである。すなわち、我として顕現することが全くなくなつたということは、無我なるものだけが実在するものとなつてゐるということである。」

本節の世親釈によると、円成実性とは前節の世親釈の中で説かれていた我といふものの対象物が、全く顕現しなくなつたこととであると注釈されている。また、注釈の最後の表現に注意したいが、「無我なるものだけが実在するものとなつてゐる」とあつて、これによって円成実性の「実在性」が説かれてゐると同時に、それまでの「顕現する」といふ性質のものとは全く異なるものであるといふことが、両者の表現の違いの中にはっきりと読み取れる。前節の遍計所執性についての注釈の最後に「無我なるものだけが我として顕現する」とあつたが、本節では「無我なるものだけが実在するものとなつてゐる」と表現されてゐて、ここに序論で問題提起した「顕現する」といふことと、「実在する」といふこととの違いがよく表されている。つまり、「私にとつて」といふ自我の埋没した時にはじめて無我なるものといふものの本質が、実在として現し出されるわけである。それまで、自分の執著や偏見によつて勝手に作り上げられていた「私にとつての対象物」といふ虚像が払拭されて、逆にそのものもつ本来の姿が有となつて現し出されてくるのである。つまり、顕現、我執、遍計所執性という凡夫の世界がひる返されて、一転してそこに実在、無我、円成実性という仏の世界が、現れる。

それが、無著や世親が主張しようとした唯識無境ということの真意なのである。